

十人十色、これはぼくの色

小五

ぼくは絵をかくことが大好きです。いろいろな色を使ってきれいにかけたときは、とてもうれしくなります。

ある日、学校のろう下にかざられた絵を、友達と見ていたときのことです。

「葉の色を、もう少し青々とした方がよかったかな。」

とぼくがたずねると、友達に

「十分、青々としていると思うよ。」

と言われました。ぼくは、少し迷った後、勇気を出して言いました。

「実はぼく、色の見え方がみんなと少しちがうんだ。」

ぼくは、すごくドキドキしていまし

た。友達がどんな反応をするか心配だったからです。すると、友達はこう言いました。

「そうなんだ。分からない色があるときは、教えてあげるから言ってね。」

それは、ぼくが予想していた反応とはちがいました。ぼくは、おかしいと言われるのではないかと、不安だったので。「きっと理解してもらえないだろう。」と考えていました。だから、予想とはちがった言葉を聞いてほっとしました。そして、勇気を出して打ち明けてよかったと思いました。

ぼくの目は、色の見え方がみんなと少しちがいます。病気ではありませんが、緑色が見えにくいのだそうです。それが分かったのは、四年生のときです。それまで、見え方がちがうことが

あるなんて思いもしませんでした。ぼくは、ショックでした。みんなとちがうということが、不安でたまらなかつたからです。

ぼくは、いろいろなものの色を確かめてみようと思いました。洋服の色、プリントをとじるファイルの色、遠くの家屋根の色など、自分が見えている色が合っているのか、確かめたかったからです。そうすると、やっぱりみんなとちがうことが分かりました。落ちこんでいたとき、お母さんがこう言いました。

「見え方に正解はないと思うよ。あなたに見えている色が、あなたの色でいいじゃない。みんなより、きれいな色に見えているかもしれないよ。いつも、きれいな絵をかいている

じゃない。」

ぼくは、目のことでなやむのをやめようと思いました。そして、かくすこともやめようと思いました。なぜなら、お母さんはぼくの目のことを理解して、みとめてくれていると分かったからです。一人ではなやんでいないで、正しく知ってもらえれば、みんなも理解してくれるし、みとめてくれるはずだと、考えるようになりました。あの日友達に打ち明けたことで、不安がなくなり、自分に自信がもてた気がします。

人はみんなちがいます。得意なことも苦手なことも、一人一人ちがいます。十人十色の個性です。ぼくに見える色は、ぼくの色で、ぼくの個性です。「みんながおたがいの個性をみんなでみとめ合えるといいな。」と思います。